

『日本及日本人』一九六四年一月（J&Jコーポレーション）

人づくりとは何か

現在の教育と人間能力の開発

矢口 新

国立教育研究所教育内容研究室長



人づくりという言葉は余りよい言葉でないとは多くの人が言うところであるが、唯一つ教育という言葉にない感覚がある。それは、「人」をつくるということ、つまり人間を意識している点である。

教育という言葉は、教育という事実と強く結びついているから、この言葉からわれわれの頭に強く思い出される点は、今現に行なわれている教育の姿である。この現在の教育は何といっても「人をつくる」という感覚がやすい。人間を育てている筈の教育がそういうことであるのは不思議であるが、現にそうである。教育の仕事というものが固定化して、教育という活動がマンネリズム化しているからである。たとえば中学校や高等学校が入学試験の準備の場として、人間をつくるというようなことはどこへやらという状態である。

もっとも人間をつくるというように言い方をすると、日本人には一種のニュアンスをもった言葉としてひびく。たとえば、人格をつくるとか、人物をつくるとか、単に知識の問題でなく、精神的態度のことを言う言葉だというように解される。現に人づくりという言葉もそういう点を強調する言葉だというように考えられている場合もある。

今私が人間をつくることを忘れていたというのは、そういう意味をこめて言っているのではない。もっと単純に、文字通りに解して「人をつくる」という、その人の方が忘れられているのだということを言っているのである。人が忘れられるのは、教育というものは、教師が教科書をつかって、これらのことをするのだという一般通念があつてそれをやっておれば教育をしていることになる。教師が形式的、表面的活動をやることで教育が成り立つという惰性ができておるとを言うのである。人を相手にしておるのだが、案外に忘れられているのではないかということである。

人を相手にする仕事だということが忘れられると、どういうことになるかという、人間が育つ姿を正しくみとめて、そこから正しい人間の育て方を考えようという考え方がなくなるのである。例えば空をとぶためには、とぶということはどうして成立しているか、これを科学的に明らかにしなくてはならぬ。そのことが明らかになつて、はじめてそれを技術として実現して空をとぶことができるようになるのである。人間を育てる場合も同様である。人が育つことを科学的に究明して、そこから人を育てる方法を生み出すのである。その人の育つ姿を究明するには、教育とは人間を相手にしておるのだということがたえず頭の中になくなくてはならない。所が、それが忘れられているのである。

今の教育は、人を忘れて教師が教科書の説明をすればそれでよいと考えている。一斉に五十人に対して授業をすれば教育になると考えて

いる。試験をやつて、生徒をおどかし、成績の順位をつけて、利口と馬鹿をふるいわければ教育になると考えている。これらは一例にすぎないが、非常に多くのあやまちをおかしている。今のような教育を熱心にやることになるのと益々そのあやまちを大きくすることになる。だから、教育でなく、人をつくるのだという点からもう一度考え直すのはよいことである。

人づくりというと、最近の原子力時代とか技術革新の時代というよ
うな時代的要請から、能力の開発こそ大切である、というように言わ
れる。この能力の開発ということについて考えてみたい。能力の開発
をどうしたら行なうことができるかということについて、現代はどれ
だけの技術をもっているだろうか。これまでやって来たような教育の
技術がそれにこたえられるであろうか。

残念ながら、これまでの教育の考え方は能力を開発するのではなく
能力をおさえているのではないか。最近の脳生理学は、頭脳は使え
ば使うほど発達するということを主張している。所がこれまでの教育
では、頭脳を働かせない教育をしている。口では頭を使え、考えな
いとこそ言うが、実際には、頭を使わせないのである。五十人の一学
級の生徒を相手にして先生が話をしている。話を聞いていてわかるな
ぞといっているが、話を聞いてわかるというのはどういうことだろう
か。教師の頭の働くと、生徒がそれを耳で聞いて大脳細胞がその刺激
で働くのとが同調しなければ、わからない筈である。しかし五十人の
生徒のうち、教師に同調する者は何人いるであろうか。まず二〇%で
ある。その他のものは、ところどころ断片的に聞いてわかると感じ
ているが、よくわからないままに過ぎていくのである。そういう生徒
にしてみれば、わからない話、或は一部分わかる話を聞いて、だまっ

て椅子にすわっているだけである。そうすると頭を働かすのは一時間
のうち何分もないことになる。教師に同調できない時は、結局は頭は
働いていないことになる。そうすると、椅子にすわるといふ忍耐力
の養成をやっていることになる。これでは能力を開発していること
はならない。少なくとも非常に多くのものが遊んでいる教育をしてい
ることになる。

教育の結果がこういうことになっていることを多くの教師は知ら
ないわけではない。教育したあとで、テストをしてみると百点の者も
いるけれども、三十点の者もいるのである。平均は六十点だというよ
うなことになっている。それでよいと思つてゐる。その理由は人間に
は馬鹿と利口があつて、馬鹿なものは、教育してもだめだという考え
方があるのである。能力は開発されるものでなく、はじめからきまつ
ているのだという考え方が強いのである。頭を働かさないのでおいて、
できないときは、生れつき頭がわるいのだというように考えるのだか
ら、能力を開発するなどという考え方は凡そ反対の考え方である。
人間はやらせればできるのである。頭を働かせればできるようにな
るのである。それをやるのが能力の開発であるのだということであら
ためて確認する必要がある。

ということとは、人間に能力のちがいが無いということではない。む
しろ人間はそれぞれ能力にちがいがあるのである。そのちがいを土台
にして教育するのである。だから一人一人を育てるといふことが考え
られなければならないのである。

能力のちがいは、今われわれが常識的に考えているように、できる
子、できない子などというちがいはない。それは前に言ったように、
教育の欠陥が生み出したものである。

人間の能力のちがいは、まず方向のちがいだと考えるべきである。何ができるかという点で能力にちがいがあるのである。人間はそれぞれできることがちがうのである。しかしその道によってかきこしというように、それぞれ何かができるのである。

今の教育は、そういうことを考えない。あらゆる教科のテストを合計して、一番から順位をつけている。まるでちがった能力なのに、どうしてそれを合計するのであろうか。全く無意味なたし算をやったり、割り算をやっている。こまったことである。

今の教育はそういう点で、分列行進をさせているのである。だいたい同じ年に生れたものが今一斉に歩調を揃えて、九年間も十年間もまったく同じように進んでいくというのもこっけいなことである。或る者は或ることに進んでどんどん進んでよいであろうし、また他のものは、他のことについてどんどん進んでいけばよいではないか。現に芸能のようなものについてはそういうことがあり得るのであるが、そういうことはあらゆる分野で考えられてよい。

特にいつせいに授業をして同じ時間で、同じことを教えて分列行進をさせるといふ教育では能力などは開発できないことを深く反省しなくてはなるまい。

このような人間の考え方を土台にして教育を行っている、生徒に對して良い影響を与えないのである。つまり、人間についての考え方がまちがって来るのである。人間にはそれぞれ能力にちがいがあ、自分の能力をどの方向に進めたらよいかを発見して、そこに自信をもって、教育を終り、それを以て社会に貢献しようと考えて行くのが、人間として正しい答えである。

所が現実には反対である。教育の仕方がまちがっていることは前にのべた通りであるが、その中で、生徒はなんでもかんでもただ点をとる努力をする。テストをうまく通過すればよいことになる。テストの点が変わると馬鹿扱いにされる。それらが合計されて、順位がつけられると、競馬の馬のようにただ競争心をあおられる。自分は何ができるか、何をもって社会に進むかを考えるのではなく、ただ同級生に勝つことだけを考える。人と競争し人をけとばすことに狂奔する。それに負けると劣等感をもつ。勝てば優越感をもつが、実はどちらにしても空虚である。自己の能力がその方向で、何ができるかを具体的につかむこと、社会につくす自分の力を考えることがすっかりわすれられているのである。

人間観というようなもの、世界観というようなものは、日常生活をつくりあげている全体的な雰囲気からつくりあげられることが多いのである。毎日毎日人と競争する感情で生活しているものが、どうなるかを考えてみるがよい。

人づくりの課題としては、道義の高揚、愛国心、民族の誇りなどといわれるが、今の教育観では、そういうものを身につけるような教育は行なえないのではないか。これも今の教育の方式に考え方のあやまりがあるのである。今の教師による一斉授業で道徳教育をやるとなると、結局お説教になるか、教科書をよむということになる。一体道徳というものは人間の行為の問題である。それが学校の授業の時間内で行なえるという考え方は、人間の行為がどうしてつくられるかということについての無知から来るものである。

道徳については日本に古い間違った考え方があ。心を養えば行為に現れる。その心を養うのは話を聞くか書物を読むかである。一体そ

の心というのは何であろうか。結局は脳の細胞の問題であろうと思われるが、行為というものは、行為を通じてのみ養われるものである。その行為を問題にしない道徳教育などはありえないが、これまでの教育はいつも、観念の上のみから行っている。

日本人の社会的公德心の低いことには定評がある。口先だけは達人だが、実行はしていないのである。町をよこすことなどは一向平気である。子供の頃からきびしくしつけられなければならぬことであるが、そういうことは家庭の両親は考えたこともない。電車やバスにさきを争つてのり、座席を取るのに目の色をかえる、一度座席をとつたら二人分を取るなどは当然のことになっている。ルールを守らないことを恥と思わない。習性ができていないのである。つまり子供の頃からしつけられないからである。

子供の頃からしつけられ、自分で実践して来たものは、他人の不道徳に憤りを感じるであろう。現在の日本人は、そういう憤りすら感じないで、他人からうまくやった、俺はうまくなかったと感ずる。この次はもつとうまくやろうと考える。全く墮落している。

心を養うとは習性をつくることである。それは、子供の頃からくりかえしの実践によってのみつくられる。それがやがて、社会を愛する心となるのである。自分が実践し育てて来た正しいと信ずる社会の生活のあり方をいつまでも愛し、維持しようとするのである。愛国心とか、民族の誇りとか、道義の高揚とかは、こういうしつけを基礎にするのである。むつかしい、高尚な理くつが育てるのではない。ここにも今の教育が、人をつくることについて無知なことを示すものがある。

人間をつくることについての無知は、日本人一般に行きわたっている。それが子供は、学校にあずけておけばそれで育つという錯覚をもっている。子供が学校で、よい成績をとるか―それはただ通信簿の数字にすぎないが―親のただ一つの関心である。したがって家庭教育といえ、宿題をやること以外にはない。親は子供に机に向うことばかりを強要する。塾に通うことばかりを強いる。子供に正しい振舞の仕方を教え、正しい物の考え方をつくるよう、日常の間に注意するなどということとは、考えない親の方が多い。たまに考えても、それがまたお説教のような形で、結局は観念の上だけである。親が率先して実行するなどということは全然みられないと言ってよい。利口な母親というのは、幼稚園時代から大学入学のことを考える母親だということになる。虚栄心をもつのがよい母親であるかの如き錯覚におちいつている。自分の子供だけがよければよいのであって、日本という国の「人づくり」をどうするかなどは全然問題としない。そういう母親を実は過去の教育が育てて来たのである。

こういう母親の考え方は、つまり一般の社会人の教育というものについての考え方である。子供を教育することは学校へ入れることであり、成績のよしあしを心配することである。それ以外のことで、教育というものは考えられない。社会の発展のために教育をどうするか、国が発展するために、どういう人間がつくられなければならないかなどという考え方は少しもないわけである。そういう点から改めなければ人づくりなど出来る筈がない。

それぞれの人間が、それぞれ能力を十分に發揮してよりよい人生をおくることが大切であり、それが全体として調和のとれた世界をつくらねばならぬなどという考え方は出て来ない。そこには、教育の機会

を均等にし、すべてによい教育を与えようという考えも出て来ないのである。勤労青少年の教育は著しく阻害されている。或は特殊な児童生徒に対しては、もっと力を入れるべきなのに、そういうものに対しては目がむかない。そういうものはどんどん振りすててもかまわないのである。

このように考えて来ると、結局、人々の物の考え方から根本的に改めなければ、人づくりという事は到底できないことになる。

つまり「人をつくる」ということは、どういうことを改めて考えなおすことである。言いかえれば人間というものに目をつけるということである。教育が人間を見失っては意味がないのであるが、今の教育に多分にそういう点がある。昔の中国に科挙の制という試験制度があつて、それが国を亡ぼしたということもある。試験制度目あてに行なわれた教育は実は教育ではなかったのである。やはり「人をつくる」ことを忘れたのである。こういうことを反省してみる必要がある。まさか今の教育がそういう状態だとは誰も思わないけれども、本当にそうだろうか。太平ムードがみなぎつていて、経済成長が謳歌されているけれども、社会は必ずしも健全に伸びていないと見られる徴候はいろいろある。それらは人間の問題に関する者が多い。

人間は常に緊張していることが出来ないかもしれないが、たるみっぱなしでもないけない。社会が理想をもち、理想に向かつて苦難の道を歩むという気迫がなければ世の中は健全にのびないのでないか、理想とはやはり経済の成長ということではない筈である。金と名誉が人間の目標である社会は長続きしたためしはないのである。人づくり、そういう雰囲気をつくり出す土台にしているなら、全く見当はずれである。

人づくりという言葉が出てきたのを機会に、人づくりとは何かを根

本的に考え直す必要があるのではないか。人づくりに理想をいろいろあげつつらつても、それは単にお題目にすぎない。教育の实体はそれと逆の方向に向っている。その矛盾をどうするのか。そこへ目を向けなければ、日本の前途は暗いであろう。

(筆者、東大文学部教育学科卒)